

北方史地资料编委会

主 编 孙进己

副主编 冯永谦 张璇如 冯季昌

陈国良 张志立

编 委 (以姓氏笔划为序)

王柏泉 王宏刚 王禹浪

王培新 丛 军 冯永谦

冯季昌 孙进己 刘 竟

庄严(女) 陈国良 陈景源

张璇如 张志立 姚义田

段新树 徐晔(女) 黎久有

东北历史地理论著汇编

分册说明

- 第一册 总 论
- 第二册 先秦—隋唐
- 第三册 辽、金、元
- 第四册 明
- 第五册 清
- 第六册 满洲发达史及各地史话
- 第七册 满洲历史地理
- 第八册 日本学者有关论文
- 第九册 日本学者有关论文
- 第十册 读书方輿记要及我国近人有关论著

序

顧よに明治四十年我會社は帝國政府の付託により、滿洲の經濟的及び文化的經營の重責を負へり。而してこれらの經營が學術的基礎の上に立たざるべからざることは言を俟たず。然るに白山黑水の地は學術界に於ては未拓の分野なりき。仍て翌四十一年東京帝國大學教授文學博士白鳥庫吉氏は會社に、滿洲史及びこれと密接の關係ある朝鮮史の研究を懇請したり。會社はこれを欣諾し、その研究を博士に委嘱したれば、博士は稻葉岩吉、箭内互、松井等、池内宏、津田左右吉等の諸氏を率ひ、先づ歴史の根柢たる歴史地理の検討より着手し、拮据精研、七年の歲月を費し、大正二年滿洲歴史地理二卷附圖一卷、朝鮮歴史地理二卷を完成したり。これら

序

一

序

二

の書は滿洲及び朝鮮の全朝全土に亘り、學術的にその歴史地理を闡明したるもの、權輿にして、學術界に貢獻したる功績は尠少ならざりき。爾來引繼ぎ歴史の研鑽を爲す豫定なりしも、故ありて會社は東京帝國大學と協議し、資を大學に提供し、その事業を大學に移せり。大學は大正四年以來數學士に委嘱して滿鮮史の研究に従事せしめ、凡そ毎年一回その報告を輯め、「滿鮮地理歴史研究報告」を刊行し、既に十五回に上れり。

滿洲國肇建せらるゝや、茲土研究の必要益々急切を加へ、上記の諸書を閲覽せむとするもの遽に増加したり。然れどもこれらの書は發行部數僅少なりしを以て今日は漸く稀觀となれり。因て就中最も要望の多き滿洲歴史地理二卷（附圖は本入らず）を重印し以て流傳を廣めむと欲す。惟學術は日月に進歩して止まず、本書の所說中にも改變訂正を要すべきもの、少からず、既に著者自ら後出の滿

鮮地理歴史研究報告等に於て改訂したるものあり。また然らずとも其後の遺跡遺物の發見により改訂せらるべくして未だ改訂せられざるものあり。此等は本重印の際一々改訂すべきものなれども今その追なく、甚だ遺憾ながら舊版のまゝ影印に付したり。是れ惟急需に應ぜむことを庶幾へるのみ幸に大方の諒恕を請ふ。

昭和十五年四月十五日

南滿洲鐵道株式會社

調査部長 田 中 清 次 郎

序

滿洲歴史地理の刊行せらるゝに當り、一言を卷首に題し、余等が南滿洲鐵道會社の委囑をうけて、滿韓史の研究をなすに至れる由來と、其の事業の經過とを略述せんとす。

回顧すれば、既に六七年の前となれり。露西亞戰役の局面收まりて、南滿洲の經濟的經營が、我が國民によりて著手せられ、朝鮮に對する保護と開發との任務が、また我が國民の頭上に落下し來りし時、余は學術上より滿韓地方に關する根本的研究をなすの急務なるを唱説したりき。其の意、蓋し二あり。一は滿韓經營に關する實際的必要よりするものにして、他は純然たる學術的見地よりするものなり。現代に於ける諸般の事業が確實なる學術的基礎

の書は滿洲及び朝鮮の全朝全土に亘り、學術的にその歴史地理を
闡明したるもの、權輿にして、學術界に貢獻したる功績は尠少な
らざりき。爾來引繼ぎ歴史の研鑽を爲す豫定なりしも、故ありて
會社は東京帝國大學と協議し、資を大學に提供し、その事業を大學
に移せり。大學は大正四年以來數學士に委嘱して滿鮮史の研究
に従事せしめ、凡そ毎年一回その報告を輯め、「滿鮮地理歴史研究
報告」を刊行し、既に十五回に上れり。

滿洲國肇建せらるゝや、茲土研究の必要益々急切を加へ、上記の
諸書を閱覽せむとするもの遽に増加したり。然れどもこれらの
書は發行部數僅少なりしを以て今日は漸く稀覯となれり。因て
就中最も要望の多き滿洲歴史地理二卷（附圖は本に入らず）を重印し以て流
傳を廣めむと欲す。惟學術は日月に進歩して止まず、本書の所説
中にも改變訂正を要すべきもの少からず、既に著者自ら後出の滿

た之に似たるものなきにあらざるべし。これ余が滿韓に關する
學術的研究の急務を叫びたる理由の一なり。次に之を學術の上
より見るも、從來秘密の幕に閉されたりし滿韓の地が、新に我が國
民の前に開放せられたるは、學界が豊富なる研究の題材を供給せ
られたるものにして、學術に志あるものは、茲に其の新研究を試む
べき絶好の機會を得たるを感ぜざるを得ざるなり。而して其の
地の事物が我が國民生活と密接の關係を有し、或は現在に於いて
我が國民の經營に委せられ、或は過去に於いて我が國民文化の要
素となりしものなるを思へば、之れが研究に従事するは我が國の
學者の當に負擔すべき任務なるのみならず、更に考ふれば、これ亦
やがて我が國民が世界の學術に貢獻する所以の道なりといふべ
し。西歐の學者が東方の研鑽に努力せること多年、自然界の現象
より人種言語、宗教、學術、文藝等諸般の人事に至るまで彼等により

て其の幽の闇かれ、其の懐の顯はされしもの甚だ多く、而して其の地域は波斯、印度の如きは言を俟たず、中央亞細亞より支那の老文明國に至り、西比利亞の曠野より、安南の半島に及び、亞細亞の各地を通じて彼等が試みたる學術的研究の功績眞に驚歎すべきものあり。我が國の學者、また實に之に依頼し、東洋のこと西人の教を俟つて始めて知るを得べしとす。吾人は西歐の學者に對して甚深なる尊敬と感謝との念を抱くと共に、吾人東洋の國民が世界の學術に對して爲すところの勢きと思ふて慚愧に堪へざるものあり。たゞ滿洲及び朝鮮に至りては、其の地の僻遠なるため、西人の研究尙は未だ及ばざるところ多きが如し。然るに今や其の地幸にして我が學界の前に開放せられ、而して之に對する我が國民の地理上及び文化上の關係は、其の研究に特殊の便宜を與ふ。我が國の學者は、此の機を逸することなく、此の地方に於けるあらゆる事物

の研究に力を盡し、其の成績を擧げて世界の學術に貢獻せざるべからざるにあらずや。これ余が滿韓研究の急務を叫びたる第二の理由なりとす。然れども學術の研究は資を要すること多くして私人の力よく之に堪ふべきにあらず、又た相關するところ廣きに涉るを以て志を同じうするもの力を協せて之に従事するにあらずんば、其の効果を擧げんこと難し。是に於いて余は余の専攻せる史學上の研究を滿韓に向つて試み、併せて世間斯の學に志あるものに研究の便宜を供すべき何等かの方法を畫せんとし、時の文部次官澤柳政太郎氏の紹介により、之を當時の南滿洲鐵道會社總裁男爵後藤新平氏に諮れり、男爵は幸に微衷のあるところを諒として、之に贊助を與へんことを快諾せられ、余に委任するに滿韓史の調査を以てせらるゝに至れり。是に於いて余は四五の同志者を學界に求め、明治四十一年一月より同會社の一室に於いて之

が研究を開始せしなり。

余等の任務は、滿韓史の研究にあるも、歴史の基礎は、地理にあり、而して此の地方の史的地理は、殆ど未だ我國の學者に顧られず、支那人及び朝鮮人の編著、また信頼するに足るもの尠きを以て、余等は先づ之を闡明するの必要なるを感じたり。然るに、上代の事蹟は、史籍甚だ乏しくして研究に便ならざるを以て、比較的、材料の豊富なる近代を先にし、其の究明せらるゝを俟つて上代に及ぼすを適當の順序なりと思惟せり。此の方針により、滿洲に關しては、第一期の研究事項を遼代以降と定め、稻葉岩吉氏は明・清時代を、箭内互氏は元明時代を、松井等氏は遼・金時代を分擔したるが、本書の第二卷に收めたるものは其の結果なり。此等の研究が成就するに至りて第二期に入り、松井氏は隋・唐時代を、箭内氏は南北朝時代及び魏・周時代の一部を、又た稻葉氏は漢代の一部を擔任し、以て上代

の研究に移りたるが、其の成績は本書第一卷に收めたるところ即ち是なり。事、眞摯なる學術的研究に屬するを以て、些末の問題にも多大の勞力を要し、或は史料の蒐集せらるゝに従ひ、或は研究の歩を進むるに従ひ、屢變改訂正を加へざるべからざることあり、之が爲めに事業の意の如く進捗せざりし憾なきにあらずと雖も、其の間また特殊の便宜を得たることあり。朝鮮が我が保護の下に歸し、次いで我國に併合せられしため、秘閣に藏せられし同國の史籍が漸次世に知らるゝに至り、之によりて半島及び之と交渉深き滿洲の歴史に貴重の資料が供給せられし如き其の一例なり。従來滿韓史の研究が進歩せざりしは、半ば史料の缺乏に基けるものなれば、此等祕籍の開放によりて、斯の學は、おのづから一新生面を開くに至るべし。本書に收められたる研究も、固より未だ完備を以て稱するを得ずと雖も、學界の樞莽を拓くに多少の力を致せる

ものなるは、余等自ら之を信ぜんとす。若し夫れ大方の識者、其の誤れるを訂し、其の足らざるを補ひ、以て斯學の研究を促進することとあらば、獨り余等の幸のみにあらざるなり。而して本書の完成と共に豫定の計畫に基きて、歴史の研究に移りたる余等は、其の成るに従ひて之を公表し、一は以て南滿洲鐵道會社の委托に背かず、一は以て聊か世界の學術に貢獻するところあらんことを期す。

終に臨んで、余等は、宮内省圖書寮、帝國圖書館、內閣文庫、東京帝國大學圖書館、學習院圖書館及び侯爵前田利爲氏、文學博士內藤虎次郎氏等が其の所藏圖書の閲覽を余等に許されしを感謝し、又た後藤男爵の後を承けて南滿洲鐵道會社總裁の任に就かれたる中村是公氏并に副總裁國澤新兵衛氏、理事清野長太郎氏、久保田勝美氏、犬塚信太郎氏、田中清次郎氏、岡松參太郎氏、野々村金五郎氏、沼田政二郎氏及び其他の社員諸氏が、多大の同情を以て余等の研究を贊

助せられたるに對し深厚なる謝意を表す。

南滿洲鐵道會社歴史調査室に於いて

大正二年八月

白鳥庫古

目 次

引用書目解説		五七頁
第一篇 漢代の朝鮮	 箭白 島 庫 互	一
第二篇 漢代の滿洲	 稻 葉 岩 吉	一〇二
第三篇 三國時代の滿洲	 箭 内 互	二〇四
第四篇 晉代の滿洲	 箭 内 互	二二七
第五篇 南北朝時代の滿洲	 箭 内 互	二八七
第六篇 隋唐二朝高句麗遠征の地理	 松 井 等	三六〇
第七篇 渤海國の疆域	 松 井 等	四〇七

引用書目解説

周禮

周代の官制を録したる政書なり、共に六篇。編者は古來一定ならず、或は曰ふ周時代の作なりと、或は前漢の末季に出づとなす、其治國の綱紀の餘りに精微せるより推すれば、後説を可とすべきが如し。

周易

支那上古の卜筮を記したるを、後人の補修したるものなり、上下二經十翼とより成る。その體裁卷數は、共に一定ならず。

春秋左氏傳

春秋は、紀年の汎稱なり。杜預曰く、記事者、以事繫日、以日繫月、以月繫時、以時繫年、所以紀遠近別同異也、故史之所記、必著年以首事、年有四時、故錯舉以爲所紀之名也と、現今に存せるは、魯の春秋にて、孔子の筆削修正を加へたる經なり。左氏傳とは、孔門の左丘明が、徧ねく當時の史書を參考して、其實質を詳記し、且つ書法義例を説明せるをいふ、共に三十卷。この經といひ、傳といふは、共に竹簡の體裁より得たる名稱なり。

春秋穀梁傳

魯人穀梁赤、春秋の經文につき、問答體を用ひて、其義理を諱明せるものなり、共に十一卷。左氏傳、公羊傳と本傳と

を併せて春秋三傳といふ。

史記

漢の太史公司馬遷撰す。凡べて一百三十篇。上は黃帝に始まり、下は武帝の太初に至る。帝王の事蹟、諸侯の沿革、英雄偉人の履歴、及び禮樂、刑政、天文、貨殖に關することを詳叙したるものなり。舊名太史公のひて、史記の稱なし。これあるは、隋書經籍志に始まれば、蓋し六朝以來今名に改められしものか。案するに、遷の父を談といひ、漢室の太史たり。彼れ編史に志ありしも、其志よりしが、遂言して厥志を紹かしめたり。太史公自序の記す所によれば、談の死は、元封元年(西紀前一一〇)にて、それより第三年目即元封三年(西紀前一〇八)を以て、遷は父職を襲ふこととなれり。本篇は、蓋し天漢三年(西紀前九八)より以降、數年の間に述作せられたるものゝ如し。本書の材料に就て、班固は、左氏國語、世本、戰國策並びに楚漢春秋を擧げり。

史記の篇數の百三十篇たりしは、古來異辭なし。然ども漢書藝文志の記載によれば、右の百三十篇の内、十篇は缺ありて、書なし」とあり。但だ從來史家の説によれば、此十篇の缺は、元帝(西紀前四八)より成帝(西紀前三二)の間に於て、褚先生之を補へりといふ。もし果して此事實をして信ならしめば、班固の時代に於て、完本たるべき筈なり。若しくは、或は秘閣の藏本は、褚氏補篇以前のまゝなりしものにや、共に定め難し。

史記は、劉宋の時に至りて徐廣、并義を作り、裴駰又其集解を成せり。何づれも、本文と別に單行せるものゝこととし、唐に入りては、老莊二氏の傳をとりて、之を伯夷列傳の上に置けり、こは老氏が李唐氏の始祖なりといふに出でたるなり。三皇本紀、又司馬貞によりて補作せらる。史記の篇數は、事實に於て、補史記の一篇を増加せり。同時に史記を注解せるもの、張守節の正義より、司馬貞の索隱あり。此時は何れも單行せるものなるがごとし、三家注即ち裴駰

の集解、司馬貞の索隱、及び張守節の正義を併せて合刻せるは、宋の元豐年代に刻まる。猶ほ經本の注釋體を合併するがごとし。明の末に、凌稚隆の評林、李本紹の増補出づ。編者之を以て從來の諸説の大成せりとするものあれど據るに足らず。近藤正義は評林本を廢りて古本の煩亂極まりといへり。吾人の知る所にては、汲古閣翻刻の史記は、宋版の集解單行本を底本となせるものにて、王應麟の翻刻せるは、開元正義本を底本となせるものなり。明の版本は、又た以上二本と篇次の殊るところあり。晚近金陵書局にて翻刻せる史記は、集解、正義、索隱を以て比較的周密に合注せり。史料より觀察すれば、寧ろ金陵本を最善となすべきがごとし。金陵本は、本書の外に札記一卷を附して宋元本史記の異同を記せり。

淮南子

漢の淮南王劉安撰す、共に二十一卷。本書は劉安の人生觀に基き世務を尙論したるものなり。安は、元封元年に死没せり。

漢書

司馬遷の史記を作ら、太初以前に限るを以て、楊雄、劉歆、褚先生、史孝山、陽城衛、馬融の徒、其後より哀本の間に至る事蹟を、各々見聞する所に由りて續集せり。後漢光武の初、班彪といふものあり、即ち班固の父なり。諸氏が續集せる所、文字鄙俗にして、史記を次ぐに足らざるを以て、此を修削し、旁ら遺聞を録して一書を成す、劉知幾は當時六十五篇を成せりといへり、これを漢書經義の初となす。其子を固といふ、父の撰書のため一家を憂るを以て更に傳史の業を繼ぎ以て大成せんと欲す。其事や蓋し明帝の永平(西紀五八―七四)中より章帝の建初五年(西

紀八〇)に至るの間に著せられたものととし、國の撰する所二十有八篇なり。唯八篇及び天文志未だ成じざりしを以て、和帝は、更に國の姪班昭に命じ、東觀の藏書閣に就き、讀いで之を成さしめ、後復た馬續に命じて昭に續いて之を成さしめき、現行本百二十卷の完數は斯くして成れるもの也。

漢書を注せるものは、古來甚だ多し。劉知幾は「始自漢書末、迄乎陳世、爲其注釋者、凡二十五家、於專門家衆與五經相亞」といへり。唐の太宗の貞觀中、顏師古亦だ注して上ぐる。宋の淳化五年、始めて之を刊行せり。

漢書補注。

共に百二十卷、漢の王先謙が、汲古閣本漢書を底本とし、古今諸家の注を合刻せるものなり。

前漢地理圖。

清の楊守敬撰す、共に一卷。

論衡。

後漢の王充撰す、共に二十卷。本書は六言、王充の人生觀に基き、時事を論議せるものなり。充は永元中卒去せり。

山海經。

支那土地の地理書なり。通行本は南山經、北山經、東山經、西山經、中山經の五藏山經を最古となす。蓋し前漢末に成りしと見せざる所なり。其他の各篇は後世の増補に係るべし。共に三十四篇十三卷なり。

後漢書。

後漢の史なり。凡べて百二十卷。内本紀、列傳九十卷は、劉宋の元嘉元年(西紀四二四)より同十二年(西紀四四五)に至るの間に於て范曄(曄)の撰述に係る。八志、三十卷は西晉の司馬彪撰す。もと續漢書といひ、紀、志、傳ともに八十篇なりしを、今は三十篇を存するのみ。彪は光武元年(西紀三〇六)死没せり。通行本は范曄の紀、傳に梁の劉昭が補注せる彪の八志を合編したるものなり。

續漢地理圖(後漢郡國圖)。

清の楊守敬撰す、共に一卷。

三國志。

魏、吳、及び蜀の史なり。本書の編纂は、太康元年(西紀二八〇)より惠帝の初年(西紀二九〇)に至る間に成を告げり。撰者を晉の著作郎陳壽となす。本書を構成したる資料について、唐の劉知幾は王沈の魏書四十四卷、これ魏の史、陳壽の吳書五十五卷、これ吳の史を挙げり。陳壽は此等の記録を基礎として六十五篇を成す、本史即ちこれなり。陳壽の前に當り、魏時に京兆の魚豢あり、魏略といふを撰したるが、事實は明帝に止まれり。其後孫盛は魏氏春秋を撰じ、王隱は蜀記を撰じ、張勃は吳錄を撰じたるなど、異聞錯出したるを以て、劉宋の文帝は、裴松之に命じて、此等異聞を纂輯し、以て陳壽の國史を補注せしめり、元嘉六年(西紀四二九)七月成を告ぐ。現行の三國志は即ち壽の本文に、裴注を加へたるものなり。裴注は鄭邠元の水經注、李善の文選注の如く甚しく割裂せざるを以て六朝の善

所は即て世注によりて考案するを得るの便あり。故之の功や蓋し陳蕃の下にあらざるべし。

晉書

晉朝及び五胡十六國の歴史なり。凡て百三十卷。唐の太宗の貞觀十八年(西紀六四四)房玄齡等勅を著して撰す。本史は陳寿の晉書を根本とし、裴松之の注を參考したり。本書に對する批評は唐代に於いて既に良好ならず、宋の章惇が文選を注する、徐鉉の初學記を編する、自居易の六帖を編する、凡て皆以前十有八家の書史を徵引して本書を引かず、劉知幾は「小人に倣はれ君子には諷するの書」といへり。宋史の編に附束縛りて、圖書散佚し、即ち編定の本書のみ存す。故に後世の書史をいふもの皆この史を本とせり。蓋し已むを得ざるのみ。

太康三年地志

晉の太康三年(西紀二八二)に於ける州郡縣等の所屬を明にしたるものなり。

撰人の名を佚す。原名は太康三年地志と呼ばれしが、梁の沈約のとき唯だ地志といひ、後魏の酈道元は地記といひ、隋の司馬彪及び張守節は地理記といひ、新唐書には土地記とせり。其説は一書をいふ。單位の記によれば、本書は晉書地理志とともに、齊梁に付はれ、沈約の宋書を撰じ、劉昭の續漢書を注し、魏收の魏史を述べしに、所載の郡縣の数は數百によられ、約するに州郡は太康に準じたり。劉昭の郡縣志を注し、魏收の地理志を述べしともは一に地記に本けり。他の酈道元等のとき、又皆其片言を襲けて觀て準的のごとくせり。今沈約の論を觀るに、州郡の二志は唯だ酈道元の志を以て太康地志を叙し、裴恒興同、用之知微雖やんと、魏收の注に曰はく「班固地理を考ひ、酈、郡縣を考へ、魏の世、三々し、晉又一改す、地理記の案する所又其次なり」と、此等を綜合する

に、本書は地記とともに頗る信を置くに足るべき地志なりしが、南宋以來、全く亡失して傳らず。清の乾隆四十九年(西紀一七八四)畢沅諸書より本書の遺文を採集して一書をなせり。

晉書地理志

晉代の地理志なり。東晉の咸康六年(西紀三四〇)王隱の撰に據る。一書。本書の地理については、太康三年地記に述ぶるところのごとし。南宋以後亡失せしか、清の乾隆四十九年(西紀一七八四)畢沅諸書の中より本書の佚文を採集せり。

西晉地理圖

清の楊守敬撰す、共二一卷。

十六國疆域志

五胡十六國の疆域を考證したるものなり、共十六卷。清の洪亮吉撰す。

宋書

六朝宋の史なり、共二百卷。梁の沈約の撰に據る。約は宋順帝二年(西紀五二二)卒せり。本書は宋明五年(西紀四八七)に著すし、聖元六年(西紀四八八)編を成す。是れ蓋し前史即ち孫資の宋史を劉勰したるに過ぎざるを以て也。劉知幾の言に宋明末、其書散に行はる。河東教子許良に割りて宋書二十卷となす。沈約凡て歎ずらく、吾れ遂は

ざる所なりと。由是世の衆をいふもの誤解を以て上となしは書を次ぐとなせり」とあり。

南齊書

南齊の史なり。共に五十九巻。梁の天監中(西紀五〇一—五二八)蕭子顯の撰述せるものなり。本書は齊の世に正統等の編纂ありしを基礎となして撰次せるものとす。

梁書

梁朝の史なり。共に五十六巻。梁の貞觀三年(西紀六二九)簡悅勅を著して撰す。本書は梁陳の文藝の遺業を承り、梁の國史に據りて編纂せるものなり。國史と併て見るべし。

陳書

陳朝の歴史なり。共に三十六巻。梁の貞觀三年、簡悅に命じて撰せしむ。同十年正月(西紀六三二)成を告ぐ。

魏書

北魏の史なり。共に百十四巻。北齊の天保二年(西紀五五一)魏收、勅命を奉じて撰す。同五年(西紀五五四)成を告ぐ。即本書なり。

水經注

黄河、揚子江以下四十餘川の經流を詳述に叙述せしものなり。共に四十巻。後魏の酈道元が、景明(西紀五〇〇)より延昌(西紀五二二)の間に撰述したるものなり。

本書は歴代之を併むるものなりき。明に至りて、朱之臣、水經注刪八を撰し、朱謀㙔は水經注纂四十を撰したるが、經注遺漏し、引誤多きを以て、清初、水經大衆纂する所の淵本を以て重訂して校正し、其佚脱せる者、二千二百二十八字を補ひ、其重複する者一千四百四十八字を削り、其體改せるもの三千七百十五字を正せりといふ。水經注の舊體はこゝに於て恢復せられたるがごとし。歐陽本水經注は即ち是なり。

酈氏が新書を撰述せるに當りて、採録せる地誌の多くは、今日無くと現存するもの鮮し。其二を示せば、西域の水道を叙説せる酈氏西域記のごとき、北方支那の水道を叙述せる酈氏地記、十三州志、地理風俗記のごとき即ちこれ也。酈氏は此等の記録を引用し、漢書の地理志に見せる水經の、今の河水に比定すべきやを論説し、併に古蹟の位置、郡邑の方向、城塞寺觀等の位置に及べり。水經注なかりせば、東、漢の地理山川は、幾と明瞭するに由なるべきなり。酈氏の文の瑰麗にして、一種の奇麗あるは、今必しも叙せよ。

水經注圖

清の楊守敬撰す。共に八巻。守敬の水經注に於ける歴代の學と稱すべし。此書は、守敬が水經注の本文研究と併せしるべきなり。

水經注要刪

清の楊守敬撰す。共に八巻。

水經注要刪補遺

高の楊守敬撰す、共に八卷。

北齊書

北齊の史なり。唐の貞觀三年(西紀六二九)太宗、李百藥に命じて撰せしむ、共に五十卷。本書は、百藥の父彪が、隋の内史令たりし時、北齊書を撰し、尙ほ未定に属しけるを、百藥に至り、父の稿本により補修刪正して之を成せるものとす。

北宋以來、本書は殘闕甚し。通行本北齊書は、舊本の面目を留むれども、其内容は、必しも舊本に非ずと知るべし。

周書北周書

宇文周の史なり、共に五十卷。唐の貞觀の初年(二七六—六三六)令狐德棻等を奉じて撰す。本書の來源は、隋の開皇中、秘監監牛弘なるもの、周紀十八篇の撰述ありたるが、德棻はこれを刪組して本書を成せり。

本史又北宋の末より殘缺し、後人北史をとりて補定せり。故に本書又た李唐氏の面目にあらずと知るべし。

隋書

隋朝の史なり。唐の貞觀三年(西紀六二九)太宗、魏徵等に命じて本史を修せしむ。徵乃ら顏師古、王通等をして編述に倣はしめ、親しく其事を監す。貞觀十年(西紀六三六)成る。凡て帝紀五卷、列傳五十卷なり。貞觀十五年(西

紀六四二)太宗更に于志寧、李淳風、韋安仁、李延壽に命じ、梁、陳、齊、周、隋五代の史志を撰せしむ。高宗の顯慶元年(西紀六五五)成る、名けて五代志といひき。隋書と別行せしも、後に至り隋書に編入し、以て今日に至れり。後世十志を以て斷限を失ふものとなし、排斥するものあれば、五代の典章文物、僅に之によりて知るを得れば、功ありといふべし。就中經籍志最も著名なり、四庫提調が「後漢以後の藝文、唯是によりて以て源流を考見し、眞偽を辨別す、亦小疵を以て病となさず」とせざるに當れり。

南史

宋、齊、梁、陳、四朝の史なり。共に八十卷。唐の貞觀の初年李延壽の撰じたるものなり。

北史

魏、北齊、周、隋、四朝の史なり。共に一百卷。唐の貞觀の初年、李延壽の撰じたるものなり。延壽の父を大帥といふ、多し同世の史事を讀めり。常に思ふに宋、齊、梁、陳、周、齊、隋は、天下を分ち、南方を北と北とを南と、北方は南方と爲す。其書各其本國に據にして他國を略し、往々事實を失ふに因れり。因て改正せんとせしが未だ成らずして没なり。延壽、即ち父の志を繼いで、此史を成せるなり。北史と自ら稱する、南史の簡略に倣す。

括地志

唐制一統の地志なり。貞觀中、太宗の皇子魏王泰撰す、共に五百五十篇。南宋以後亡失して傳はらず。高の顯慶二年(西紀一七九八)孫思邈諸史傳中より本書の佚文を採集して一書をなせり、共に八卷。

通典。

支那の上古より、唐の天寶に至る歴代政教の記録を分類編次せるものなり。其部門を八となす。食貨、選舉、職官、禮樂、兵、刑、州郡、邊防これなり。共に二百卷。唐の大暦の初年（西紀七六六―七七三）に尚書左丞鄭元佐の建議に係る。吾人の見たる所によれば、傳存の刊本に三種あり。一は北宋本（宋神宗元祐中）にて、我が紅葉山文庫の舊藏に係る。二は明新編刊本。三は清入宋儒稿本これなり。通行本は乾隆刊本にて、前記三種の本書を底本となしたるものなるが、三種中の最善本なり。

全唐文。

清の嘉慶十九年、董誥等詔を奉して撰せり。共一千卷。唐代作家の文集を彙輯せるものなり。

賈耽道里記。

新唐書（卷四十三下）の地理志に收めあり。同書列傳によれば、耽は、貞元の宰相なり。地理事を好み、凡そ四夷の使及び四夷に使して還るものあれば、必ずこれと從容其山川土地の終始を叙べり。吐蕃の國右を臨れしとき、耽乃ち數十卷併ひ圖を爲して上つれり。漢唐之を覽て稱善せりといふ。貞元十七年（西紀八〇〇）には海內華夷圖、及古今郡國縣道四夷述四十卷の著あり。これ恐らくは有唐一代の大作なりしならむ。華夷圖の大きは廣三丈、縱三丈三尺、率一寸を百里となせり。理學博士小川琢治氏は「惟ふに方輿圖法は蔡秀の創意なるべきも、賈耽の華夷圖を用ふるに及びて、始めて廣く世に行はれ、支那流布圖の様式として永く後世に傳はれるならむ」といへり。地理記

は前記四夷述の中より摘錄せられたるものなるべし。惜むべし、四十卷の多分は、佚して傳はらず。新唐書の外には、三國史記に於て一二節の佚文あるを見るのみ。疑ふらくは、唐五代の間に於て半島に傳はれるものと断片なるべきなり。

新唐書。

唐朝の歴史なり。凡そ二百二十五卷。中、紀志、及表は、宋の嘉祐五年（西紀一〇六〇）七月、歐陽修の撰するところ。列傳は、盛徳中（西紀一〇四一―一〇四八）宋祁の撰するところに係る。本書は、斯く兩人の別々に撰述したるものなれば、重複の個處少からず。吳縯の新唐書料簡には、兩者の間に編述の事實を通知せざりし結果、斯く誤謬を來せりといへど、それは二人者の同時に撰述せりと信ぜざるより生じたる誤解なり。宋祁の列傳は、歐陽修が至和元年（西紀一〇五四）に著せし以前既に稿を脱せるものなり。本書、舊唐書に比して文筆簡潔なれど、史實の上より考ふれば、寧ろ舊野の詳備なるに如かず。歐陽修は本書に對して自らも不十分なりしと思考せるものとてし。

舊唐書。

唐朝の歴史なり。共に二百卷。石室の劉昫等が撰に係る。本書撰述の何年に開始せられしかは詳ならざれども、天祐年間（西紀九三六―九四六）に成りしは疑なからむ。

五代史記（新五代史記）